関西邦画展覧会顛末

土井久美子

序

大阪市立美術館には住友本社寄贈として二十点の日本画が所蔵されている。収蔵品台帳には昭和三十二年二月四日付で、以下の日本画が記されている。

①芸能譜　中村貞以（一九〇〇～一九八二）〈１２４４　以下収蔵品番号〉
②聖苑　石崎光瑤（一八八四～一九四七）〈１２４５〉
③絶澗の夕　西山翠嶂（一八七九～一九五八）〈１２４６〉
④秋陽　小野竹喬（一八八九～一九七九）〈１２４７〉
⑤朝霧　金嶋桂華（一八九二～一九七四）〈１２４８〉
⑥夜桜　北野恒富（一八八〇～一九四七）〈１２４９〉
⑦桜　福田平八郎（一八九二～一九七四）〈１２５０〉
⑧如意輪観音　堂本印象（一八九一～一九七五）〈１２５１〉
⑨朝靄　榊原紫峰（一八九七～一九七一）〈１２５２〉
⑩千槍将発　菅楯彦（一八七八～一九六三）〈１２５３〉
⑪北政所　菊池契月（一八七九～一九五五）〈１２５４〉
⑫幽谷早春　水田竹圃（一八八四～一九五八）〈１２５５〉
⑬若松　徳岡神泉（一八九六～一九七二）〈１２５６〉
⑭讃光　橋本関雪（一八八三～一九四五）〈１２５７〉
⑮晩秋　上村松園（一八七五～一九四九）〈１２５８〉
⑯風　山口華楊（一八九九～一九八四）〈１２５９〉
⑰出潮　窠本一洋（一八九三～一九五二）〈１２６０〉
⑱那智奉拝　矢野知道人（一八九〇～一九六五）〈１２６１〉
⑲松　宇田荻邨（一八九六～一九八〇）〈１２６２〉
⑳山本元帥　中村大三郎（一八九八～一九四七）〈１２６３〉

これらの作品の寄贈を住友本社から受けたのは、昭和十九年一月だが、台帳に記載された日付は、昭和三十二年の二月となっている。

大阪市立美術館は大正九年に大阪市議会で開設が認められたが、昭和十一年の開館までには十数年の年月がかかった。開館の翌年七月には中華民国との間で戦争が起こり、昭和十六年には太平洋戦争へ突入していく混乱の時代である。国民全体が戦争に巻き込まれるなか、昭和十六年十月には美術館の南半館を陸軍に接収された。その後も戦況は次第に苛烈になり、美術館の事業は徐々に縮小されて

いった。戦争終結後は二年間にわたり全館が連合軍に接収され、収蔵庫は封印され、事務部門は難波の精華小学校に移転を余儀なくされた。戦中戦後のこのような混乱のなかで寄贈作品の館蔵品台帳記載作業も滞っており、開館後二十年を迎えた頃に漸く戦中戦後の混乱期に寄贈された作品についての台帳記入が行われた。そのため寄贈年日が昭和三十二年となってしまい、この時点で既に財閥解体により消滅していた住友本社の名称が寄贈者名として記されるという奇妙なことが起こった。

冒頭の作品の寄贈の契機となった「関西邦畫展覧会」（以下邦画と表記する）の開催のいきさつと、出品作品の制作過程、寄贈の期日など、展覧会と寄贈に関わる概略は村松寛氏の著作などによって知られており、大阪市立美術館の五十年史にも記されている[1]。しかし当館の戦前戦中の書類の大半は殆ど失われてしまっており、詳細については村松氏の著作や伝聞によるところが多かった[2]。

ところが、住友史料館には、「関西邦画展覧会」開催の資金提供者である住友本社の立場から見た展覧会開催の経緯をうかがうことのできる貴重な資料が残されている。展覧会開催の経緯、作品制作の実際、寄贈までの顛末など、これらの資料を参考にしながらその概要を紹介する[3]。

一、朝日新聞による展覧会開催の提案　昭和十七年二月

昭和十七年二月二十五日、朝日新聞大阪本社業務局長の天野四郎、参事の木村己之吉両氏が大阪の住友本社を訪れ、北澤敬次郎常務理事に「大東亜戦記念作品画援助買い上げについて」の申し入れがなされた。住友本社の記録（❶）によると、その企画の当初案は次のようなものであった[4]。

（一）京都画壇を中心に各画塾の文展無鑑査以上の画家を四十名選抜し、大東亜戦最中に於ける時代的感激を後世に伝える作品の制作を依頼する。

（二）作品を篤志家に十五万円で買い上げてもらう。

（三）画伯たちが得た揮毫料十五万円を、画家の名前で朝日新聞社提唱により軍用機献納資金として拠出する。

（四）作品は朝日新聞社主催で、東京、大阪、名古屋、京都、福岡で一般に展覧した後、作品を引き受けた篤志家の名義で適当な美術館等に一括寄贈する。

つまり朝日新聞は作品を買い上げる篤志家の役割を住友家に依頼したのだ。依頼金額は十七万円で、内訳は前述の軍用機資金献納費（十五万円）、表装及び保管装備費（一万円）、作品画の原色刷出版費（一万円）であった。この申し入れに対し北澤は総理事古田俊之助と元常務理事で歌人として著名であった川田順の意見を聞いた上で意義があると判断し、家長住友吉左衛門の許可を得た。北澤は三月十二日に再訪した朝日新聞社刀禰館正雄、天野四郎、木村己之吉の三氏に受諾の返答をしている。

ただし住友側は条件として展覧会終了までは寄付者が住友であることを発表しないこと、展覧会後に住友が引き取った作品の贈呈作としては大阪美術館（当館）を希望することを述べ、そして美術館に作品を寄贈する時には大阪市長と美術館館長が、寄贈申し込みの時には朝日新聞社の幹部が住友側とともに立ち会うこと、図録は相当数住友におさめてもらいたいこと、展覧会の諸費用は朝日新聞が負担することを条件とした[5]。

以下に記したものが初回の訪問に関する決裁書類に付されていた展覧会の要項（資料一）である。

資料一　「大東亜戦に際して美術文化の保存と軍用機献納」

（※以下資料は旧仮名遣いを一部新仮名遣いに改めた）

京都画壇を中心に各画塾の指導者によりてその画塾より文展無鑑査以上を選抜し約四十名前後の画伯に、大東亜戦争最中の日本に於て、各画伯のこの時代的感激を後世に残す事

一、各画塾より若干の委員によりて画面の寸法、制作期日、展覧会、出版、軍用機寄託等の協議をなす

二、参加団体

竹杖会、菊池画塾、早苗会、東丘社、等（青甲社を追加とメモ書き）栖鳳、契月、翠嶂、曼舟、関雪、松園、印象、平八郎、荻邨、桂華、竹圃、大三郎、紫峰、神泉、一洋、知道人、恵一、光瑤、竹喬、華楊、微笑、硯山、遙村、春浦、守明、鉄山、十糸子、晁勢、松篁、二峯、倉丘、楯彦、不矩、阿古、各画伯[6]

京都画壇代表作家全部網羅

三、大東亜戦記念作品の展開

制作は各画伯の傑作にて、人物、風観、花鳥、其他あり、これ等作品を朝日新聞社主催下に東京、大阪、名古屋、京都、福岡にて展覧会を催す

四、全作品の原色出版

制作々品に対して揮毫者の一首を加へ更に各画塾の説明等既述し、作品画は全部京都便利堂にて原色刷出版とする

五、全作品の引受者

約四十点の記念作品に対して、金十七万円の寄贈者に作品全部を贈呈する、作品贈呈せられた方は更にその人の氏名を以つて美術館か神宮、神社か記念館かに一括して寄贈し、一般公共の展観に供する

六、金十七万円使途

一金十五万円　軍用機資金献納、各画伯氏名にて

一金一万円　表装及保管装備費

一金一万円　出版費、但し補助として便利堂に与へ二百冊を無料提供

金十五万円は各記号画伯氏名にて朝日新聞へ軍用機資金として寄託する事

七、資金提供者及揮毫者

金十七万円提供者は、今日の美術を後世に残し、更にその揮毫者を通じて軍用機献納資金に協力援助せし事になり一石二鳥策である

また揮毫者も後世にこの時代の芸術を幾百年に伝へ併せて各画伯の努力が軍用機となってお国に捧げることになる

以上

二、展覧会企画内容の変更の打診　昭和十七年七月二十三日

四十名の京都画壇の作家に作画を依頼、完成した作品に対して、篤志家である住友が買い取り、その揮毫料を画家が軍用機献納資金として寄付するとして出発した朝日新聞の事業は半年後に新たな展開を迎えたことが七月二十三日の住友本社の寄付に関する四二九号の決裁（❷）からわかる。

七月三日、朝日新聞常任監査役の刀禰館正雄、理事朝倉斯道、業務局長天野四郎三氏が住友本社北澤常務理事を訪ね、情勢が変わったのでいくつかの点を変更したいと申し入れたのだ。最も大きな変更点は住友本社が寄付した十五万円の行き先である。当初は軍用機献納資金として画家自らが寄付することが揮毫の条件になっていた

が、それを取りやめ絵具代として画家に渡すということが申し入れられた。

その理由は朝日新聞社と画家との交渉の結果にあった。この頃、画家は「彩管報国」の機会が多くなり、甚だしい場合は一人で十四、五枚も揮毫を余儀なくされた人もいるので、これ以上はとても描けないといわれたというのだ。そこには画家の言葉として、「真実の気持ちを吐露せば飽き飽きしてもう沢山との連中多し」という文言までが記されている。

日中戦争から太平洋戦争にかけての間、彩管（絵筆）をとって、国に尽くすという「彩管報国」の名のもとに、画家たちは多くの戦争画を制作した。後に関西邦画展覧会という名称で呼ばれることになるこの展覧会も、冒頭の企画書によれば。当初は大東亜戦記念作画展覧会という仮称のもとに、朝日新聞が企画したものだった。同様の戦争と関連する美術展覧会が、国そして軍関係の美術団体、あるいは新聞社の後援や主催によって開催された。そのためいわゆる戦争美術展が作家にとっては作品発表の場となっていたのである。戦時下では朝日新聞も多くの戦争美術展を企画しており、この展覧会もその一つであった。一方、絵具の使用が制限されるようになり、画家たちは極めて過酷な制作環境にあったことが推測され、もはやこの時期では無償で大作を仕上げる余裕がなかったものと考えられる[7]。

しかしこのような状況下にあっても、展覧会は中止の方向に向かわはかった。飛行機献納資金として全額の寄付を条件とすることを諦め、朝日新聞社の文化事業として「大東亜戦争の感激を後世に遺す傑作」を展示するため画家に協力を懇願することとなった。

もう一つの変更点は画家の選定であった。当初は画塾を中心として新進画伯を含めた四十名前後の制作者を予定していたのだが、これを半分である二十一名に減らすことが提案された。理由としては「将来画才の一段と伸びる新進画家に於いてはその本人自身が将来自分の画に対し顧みて忸怩たるものあるやも図られず、斯くては不面白次第に付き此の懸念無きを保し画塾中心主義を取りやめ既成大家のみの大物主義に改め度し」と記されている。

さらに三番目の変更点は当初は事前に作品買い上げ者が住友であることを制作する画家たちに通知する予定であったが、これも展覧会終了後に発表することとした。その理由は住友が大阪市立美術館へ寄贈することを事前に画伯が知ることによって画心を傷つけることを懸念したためであった。

このような経緯をふまえて、揮毫を依頼する画家として名があがったのは、竹内栖鳳、菊池契月、西山翠嶂、川村曼舟、橋本関雪、上村松園、堂本印象、宇田荻邨、福田平八郎、金嶋桂華、中村大三郎、榊原紫峰、徳岡神泉、小野竹喬、矢野知道人、石崎光瑤、水田竹圃、山口華楊、管楯彦、北野恒富、吉田秋光の二十一名であった[8]。

三、展覧会開催一ヶ月前の中間報告　昭和十八年四月二十日

四月二十日、朝日新聞社の業務局長天野四郎氏と編集局次長朝倉斯道氏、企画部長平井常次郎氏が「大東亜戦争記念作画展」の中間報告のため、住友本社の北澤常務のもとを訪れた。昭和十八年四月二十六日の報告書（❸）によれば、昭和十七年の十一月二十八日、朝日新聞社の村山社長が京都岡崎の料亭つる家に揮毫予定の画家を集めたおり、作品制作の締め切り、搬入などについて説明がなされ、

了承が得られているとのことであった。

（一）題材　戦争そのものに拘泥せず各自の最も得意とするものを制作すること。

（二）大きさ　文展出品を目標とし、それ以上は可。

（三）完成　五月二十日まで

（四）搬入　五月二十一日

ところが、締め切りまで後一ヶ月という時期にもかかわらず、制作が進んでいなかったため再読督促しているというのである。また当初揮毫を予定していた竹内栖鳳と川村曼舟が逝去したため、二十一名の予定が十九名になってしまった。そのため山口華楊から推薦のあった案本一洋を加え二十名としたとのことであった。

そして展覧会の会期は大阪が六月九日から十九日まで、京都は六月十九日より二十三日まで、七月に入ってから東京に巡回する予定であることが伝えられた。そしてこの時点での揮毫予定者を記した資料（資料二）が朝日新聞から住友側にとどけられた。

資料二「関西日本画段大家動員　美術文化顕揚運動構図表」

※（）は鉛筆書き

（1）北野恒富画伯（既に着手し居れり）
題未定　二曲半双　朧月夜のもと桜華爛漫たる中に若き女性が雪洞に灯を入れている図

（2）山口華楊画伯（出世作牛の向ふを張るもの）
豹　二曲半双

（3）小野竹喬画伯（三年超の力作最後の仕上げに努力中）
秋陽　二曲半双

（4）金嶋桂華画伯
未定題　二曲一双　花鳥を描く

（5）宇田荻邨画伯
題未定　二曲半双　桜を描く

（6）案本一洋画伯
題未定　八尺二枚折（八尺に六尺）風景を描く

（7）上村松園女史
題未定　縦物（三尺に五尺）美人画

（8）水田竹圃画伯
題未定　横八尺　縦八尺　春の宇治を描く

（9）石崎光瑤画伯
題未定　横四尺　縦七尺　花鳥を描く

（10）西山翠嶂画伯
題未定　二曲半双　花鳥を描く

（11）福田平八郎画伯
題未定　二曲半双　鴛鴦を描く

（12）榊原紫峰画伯（最初商品と予定し居りたる模様なるも、他画伯が大ものなるを聞きてこれ丈の大きさのものにした経緯あり）
題未定　縦四尺　横三尺　花鳥を描く

（13）中村大三郎画伯（最近は人物を画き居れり）
題未定　二曲半双乃至一双　国民精神作興を企画し孝明天皇を描き奉る

（14）矢野知道人画伯
那智の瀧　縦九尺　横六尺

（15）管楯彦画伯
題未定　二曲一双　戦国時代の武者か又は風俗画を描く菊

（16）菊池景月画伯（気品あり、傑作とならん）
　題未定　二曲半双　風俗画を描く
（17）中村貞以画伯（着手し居れり）
　題未定　二曲一双　両親の前で子どもが舞の稽古をしている図柄
（18）堂本印象画伯（原画完成しあり）
　題未定　二曲一双乃至六曲片双　仏画を描く
（19）徳岡神泉画伯
　題未定　二曲一双乃至六曲片双　花鳥を描く
（20）橋本関雪画伯（3／22北京へ出発旅行に出かけたる由）
　題名及び寸法は未定なるも本年三月志那旅行によって収穫せるものに画材を採って大作を描く

以上が締め切りを一ヶ月後に控えた四月二十日に朝日新聞側が持参した作画の進捗状況の概要である。画家たちの制作が全く進んでいないことがわかる。

四、大東亜戦記念作品画展覧会延期の報告

昭和十八年六月一日

昭和十八年六月八日付の書類（❹）によれば、作画の締め切りが五月二十日、搬入が翌二十一日、そして大阪市立美術館における展覧会の開催が六月九日からと予定されていたのにもかかわらず、その展覧会開催の約一週間前にあたる六月一日になって、朝日新聞企画局次長であり、大阪本社企画部長を兼務する平井常次郎氏が住友本社に来訪した。突如の来訪であったのか北澤常務理事が不在であり、応対した庶務課員野口氏に、朝日新聞側は大阪市立美術館で六月九日から十五日まで開催される予定であった展覧会の延期を願い出た。

延期の理由としては山口華楊が南方に従軍のため出発すること、竹内栖鳳の遺作展が高島屋で開催中であるため、作品が借りられないこと。そして美術報国会結成の準備のために多くの画家が時間を割かれ、作品が完成していないことなどがあげられた[9]。

以上のことから作品の締め切りを二ヶ月、七月二十日まで延期し、展覧会は九月一日から開催、七月から九月までの期間作品は美術館で保管することなどが決まった。

五、戦時文化発揚「関西邦画展覧会」会期再度変更

昭和十八年八月三十日

昭和十八年八月三十一日の報告書（❺）によれば、一旦九月一日に開催を二ヶ月延期した展覧会であるがさらに再度の延期が告げられた。

八月三十日になって朝日新聞者企画局次長平井常次郎氏が北澤専務理事を展覧会の招待状百枚（資料三）を持参して来訪。作品完成の都合により大阪の会期を九月一日から九月六日に延期、六日から十四日までの九日間に変更したいので了解を得たいとの申し入れがあった。おそらく企画を運営する朝日新聞と会場となった大阪市立美術館の間では様々なやりとりがあったことが推測できるが、こうした急な変更、そして出資者にそれが直近に告げられるという事態は現代では考えられないことである。

話は変わるが、この書類に添付された展覧会の招待状の文面によって、展覧会の正式名称が「戦時文化発揚関西邦画展覧会」と決ま

ったことがわかる。

資料三　「戦時文化発揚関西邦画展覧会」招待状

謹啓　愈よ御清栄の段お慶び申上げます
陳者今般本社主催の下に先の通り『戦時文化発揚関西邦画展覧会』を開催致します。本展覧会は大東亜戦争下における日本画の至高なる水準を示しこれを一括して永久に後世に伝ふべく特に関西画壇の大家二十氏に依嘱したものでありまして、各画伯は皇軍の大戦果に対する火の如き感激を率直真摯にその芸術に盛上げた最高級の作品を制作、決戦下日本文化の逞しい一面を十分に発揮せるものと確信いたします、何卒御家族御同伴御鑑賞の栄を賜はり度右御案内申上げます
昭和十八年九月
朝日新聞社

九月六日より十四日まで　大阪市立美術館
同二十に日より二十八日まで　大礼記念　京都美術館

揮毫画伯（五十音順）石崎光瑤　上村松園　宇田荻邨　小野竹喬　金嶋桂華　菊池契月　北野恒富　榊原紫峰　菅縦彦　堂本印象　徳岡神泉　中村大三郎　中村貞以　西山翠嶂　橋本関雪　福田平八郎　松本一洋　水田竹圃　山口華楊　矢野知道人

また、展示作品リスト（資料四）は以下のようなものであった。

資料四　「戦時文化発揚関西邦画展覧会」大阪・京都展展示リスト1

※（）内は鉛筆書き

戦時文化発揚
関西邦画展覧会

昭和十八年九月六日より十四日まで　大阪市立美術館
同　九月二十二日より二十八日まで　大礼記念京都美術館

主催　朝日新聞者

目録（五十音順）

聖苑　石崎光瑤
讃光　橋本関雪　（搬入済み）
絶澗の夕　西山翠嶂
如意輪観音　堂本印象
若松　徳岡神泉
秋陽　小野竹喬
晩秋　上村松園　（8日）
野鶴　金嶋桂華　（6日）
山本元帥　中村大三郎　（6日）
藝能符　中村貞以　（7日）
松　宇田荻邨
那智奉拝　矢野知道人　（搬入済み）
（南方従軍中につき出品延期）山口華楊
出潮　松本一洋　（搬入済み）
櫻　福田平八郎
朝靄　榊原紫峰　（10日）

北政所　菊池契月　（6日）
夜　櫻　北野恒富　（搬入済み）
幽谷早春　水田竹圃　（搬入済み）
千槍将発　菅　楯彦
以上

作品リスト案に記された（）内の鉛筆書きの表記により、八月三十日までに搬入された作品が橋本関雪、矢野知道人、窠本一洋、北野恒富、水田竹圃の五点にすぎないこと、そして六日からの会期にも関わらず、六日の搬入予定者が金嶋桂華、中村大三郎、菊池契月の三人であり、七日に中村貞以、八日に上村松園、十日に榊原紫峰が搬入予定とあるものの、九人の画家については予定が未定であることがわかる。そのうち山口華楊は南方に従軍中であるため実質的に会期に間にあわないのだが、残る八人についてはどうなったのだろうか。

六、関西邦画展覧会の出品状況について

昭和十八年九月二十一日

さて結局、関西邦画展覧会は昭和十八年、九月六日から十四日まで大阪市立美術館で、続いて九月二十二日より二十八日まで　大礼記念京都美術館で、開催された。しかし京都展が終了する前日にあたる九月二十一日、住友本社に朝日新聞者企画局次長の平井常次郎氏より電話による報告があり（❻）、それによると、二十点の出品予定作品のうち十五点が展示された。大阪会場に出品されなかったのは山口華楊の作品と、「北政所」（菊池契月）、「桜」（福田平八郎）、「朝靄」（榊原紫峰）、「千槍将発」（菅楯彦）の五点であった。

このうち、菊池契月の作品は京都展の開会前日である二十一日に、福田平八郎と榊原紫峰は満足するものが描けなかったので出品を容赦願いたいとの申し出でがあり、そのため現在激励中であるとのことが記される。また菅楯彦は神経痛で療養中につき大阪会場に来場したが、出品は当分できないとのことであった。

これらの報告から結局「関西邦画展覧会」大阪会場では二十点のうち十五点が、京都会場には十六点の作品が出品されたことがわかる。添付されている修正された目録（資料五）を掲出しておく。[10]

資料五　「戦時文化発揚関西邦画展覧会」大阪・京都展展示リスト2

目録（五十音順）　※（　）内は鉛筆書

聖　苑　石崎光瑤
讃　光　橋本関雪
絶澗の夕　西山翠嶂
如意輪観音　堂本印象
若　松（未完成）　徳岡神泉
秋　陽（加筆予定）　小野竹喬
晩　秋　上村松園
野　鶴（加筆予定）　金嶋桂華
山本元帥　中村大三郎
藝能符　中村貞以
松　宇田荻邨
那智奉拝　矢野知道人
（南方従軍中につき出品延期）　山口華楊

出　潮　　松本一洋
櫻（京都出品の予定　大阪未出品）　福田平八郎
朝　靄（京都出品の予定　大阪未出品）　榊原紫峰
北政所（京都出品の予定　大阪未出品）　菊池契月
夜　櫻　　北野恒富　搬入済み
幽谷早春　　水田竹圃　搬入済み
千槍将発（京都に間に合わない見込み大阪未出品）　菅　楯彦

七、関西邦画展図録に関すること　昭和十八年九月二十七日

さて、京都展が終わる前日の九月二十七日、朝日新聞企画部小川氏から住友本社に電話が入る（❼）。当初は原色版で作成する予定であったが、便利堂に訪ねたところ原色版では期日までにできる見込みがたたない、単色コロタイプ版であれば来年の六月までにできるといっているとのことだった。住友側は費用を提供するものの、朝日新聞の企画なので、指図はできないと考えていたようだ。しかし展覧会の延期や、京都での展覧会会期が終了したにも関わらず、従軍している山口華楊はともかくとしても、まだ三点の作品が出品されていないなど予期せぬことが続いて起こっている。朝日新聞であるからと信頼を以て援助したはずであったのにもかかわらず住友側としては「如何にも尻すぼみの計画に終わらんとするは期待に反し甚だ遺憾」であると、朝日新聞側に表明している。

それに対して平井氏は、この後展覧会を東京三越において開催すること、当初の予定では福岡で開催する予定だったが、輸送が困難なので、大阪、京都のみに変更したが、未出品の四点が完成次第改めて大阪で再度展覧会を行うことを提案した。また図録についてはコロタイプとしたが、時間の猶予が与えられるのなら、当初の計画通り原色も可能であると伝えた。

この日の会合において住友側は、作品が全て揃った後、再度大阪で展観し、その時には住友が費用を負担したことを明らかにして、市長立ち会いのもとで、美術館に寄贈を行いたいこと、図録はこの時局なので出版が遅れるのはいたしかたないため、原色版で進めて欲しい旨希望を伝えて終わっている。

八、東京三越での展覧会開催　昭和十八年十月二十七日

昭和十八年十月二十七日朝日新聞企画局次長平井常次郎氏より東京三越において会期十月二十二日から二十九日まで開催中の関西邦画展についての経過報告が入る（❽）。

平井常次郎からの手紙によると、三越美術部の評判は頗るよいとのこと。小野竹喬が大阪、京都で出品した「秋陽」という作品に満足できないというので、東京では異なる作品を出品したこと。榊原紫峰、福田平八郎の二人が朝日新聞の極めて強硬な督促にもかかわらずまだ作品を完成させていないことが報告された。榊原紫峰は二十年ぶりに大作を仕上げようとしており、福田平八郎も桜の完成をめざしているが、怠慢ではなく、満足出来る作品ができないため完成が遅れていると記している。

また神経痛のため制作が遅れていた菅楯彦は熱海で静養して治そうとしており、山口華楊は十月上旬に三ヶ月の従軍から帰洛したが、海軍委託の作戦記録画の制作中なので、何とか年内に作品を仕上げたい旨が記されている。そして翌昭和十九年の一月には予定の全て

の作品が揃い、大阪市立美術館で再度展覧会を開きその威容と盛観を示したいこと、それにあわせて図録を作成中であることが書かれている。

九、未完成画の進捗状況の報告　昭和十八年十一月十日

十一月十日、朝日新聞の平井常次郎は住友本社に北澤常務理事を訪ねて来訪したが、留守のため総務の野口氏が対応。その時、東京三越の展覧会会場で撮影した作品写真十六点入り五部を持参し、東京展の報告を行った。東京では多数の来館者があり、関西邦画壇の作品がこのように多数纏まって展観されることが初めてだと専門家の話題にあがったと述べている。

東京展の段階での出品作は結局十六点で以下の四点が未完成であった。菅楯彦の「千槍将発」は有馬温泉で療養中しており、回復してきたので年内に完成する。福田平八郎の「櫻」は既に四、五枚描いたものの、会心の作ではないため、何とか年内に完成させたいとのこと。山口華楊（画題不詳）は制作中で年内に完成予定であること。榊原紫峰の「朝靄」は、遅筆なので、早めにはじめ、鹿を題材にしたのだが、自信をもって線がひけず、家族の病気もあって、本人が少しまいってしまっている。出来れば年内に完成させたいといていることなどが伝えられた。

このような状況なので、全作品はなんとか来年初めて出そろうだろう。そのため天王寺での第二回目の展覧は一月下旬の見込みになるだろうと記されている。

十、昭和十八年年末の未完成画の進捗状況　昭和十八年十二月二十八日

十二月二十八日付、平井常次郎から北澤敬次郎への書簡（❾）によれば、東京で展観された十六点の作品が展覧会の終了後十一月二日に大阪市立美術館に到着し、地下室で保管されていること。

未完成の四名について、菅楯彦が三朝温泉で静養中だったが、現在熱海に移動して制作中。三点描いており、どれにするか悩んでおり、加筆中。菅には企画部次長の逸見氏がついており、一月十日までには完成の予定であること。

福田平八郎については平井が二十一日に画室に出向いたところ、七回書き直して現在半分まで完成。高野山から奈良、日光中禅寺湖、赤倉、沓掛、軽井沢と歩き、桜と山吹を描こうとしたが、桜山吹は宗達の名品があるので、それに押される気がして山吹をやめたとのこと。文展にも出品せずにこの絵のために頑張っているがまだ満足がいかない。それでも日ぐらいには完成するとのこと。

山口華楊は十一月初めに帰洛。海軍記録画の制作にあたっていたが、そちらが完成したので十二月十日ぐらいから邦画展の作品の制作にかかり、一月十日までには完成とのこと。画題は豹を予定していたが、心境が変わったようで、未だ口にしていないとのこと。

榊原紫峰は色々と泣き言をならべてなかなか描いてもらえないので困っているとのことなど書かれていた。

十一、全作品完成と大阪市立美術館での寄贈作品贈呈式について

昭和十九年一月八日

明けて昭和十九年一月八日、朝日新聞平井常次郎氏が住友本社を訪れ、北澤常務理事と面会。一月十七日月曜日に市当局に作品を贈呈したいがとの照会があった（⓭）。

榊原紫峰の「朝靄」、福田平八郎の「櫻」、山口華楊の「柳」菅楯彦の「千槍将発」の四作品のうち榊原紫峰以外の三人が十四日までに完成できるめどが立ったというのである。榊原紫峰については未完成だが、その現品をとりあえず搬入するか、不可能ならば目録のみとし、他の十九点の作品画とともに市立美術館に一堂に展示し、大阪市長、森下助役、足立美術館長、村山朝日新聞社長、揮毫画家全員が参列して贈呈式を行う。可能ならば住友男爵にも出席を賜りたいとのことであった。

住友側とすれば一月十七日とはあまりに切迫しているので、延期は不可能か問い合わせた。しかし大阪市立美術館で一月二十日から大東亜美術展開催が決まっており、そのための搬入作業がはじまるので難しいとの返答があり、十七日なら市長、助役ともに都合がよいのだが、最悪の場合は十八日にということではいかがかということになり、結局十七日午後四時に贈呈式を挙行することとなった。

十二、戦時文化発揚『関西邦画展覧会』作品贈呈式

昭和十九年一月十七日

一月十七日午後四時から、大阪市立美術館で住友男爵から作品を一括美術館に贈呈する式が挙行された。（⓮）出席者は大阪市板間市長、森下助役、田坂市民局長、美術館上野館長、住友からは総理事、北澤常務、富岡支配人、妹尾課長、野口課員、川田順、朝日新聞からは村山社長、上野会長、石井専務、山本常務、企画部関係社員、画家としては上村松園、石崎光瑤、北野恒富、宇田荻邨、中村大三郎、中村貞以、徳岡神泉、山口華楊、小野竹喬であった。

式に先立ち、一堂が作品を内覧、午後四時十分から式執り行われた。式次第は先ず村山社長より展覧会の企画の趣旨、各地の展覧会の盛況、住友家の寄贈の理由などの紹介があり、大阪市に対して、作品を少なくても千年は保管せられたい旨の挨拶があった。次ぎに住友本社古田総理事から目録贈呈と挨拶、板間大阪市長からの謝辞、画家代表として石崎光瑤氏（いろは順）から計画に賛同して感激して執筆した旨が述べられた。その後、平井部長から各地の展覧会における作品出品数の報告があり、最後に未完成の四点のうち、山口華楊、福田平八郎の作品は昨夕八時にとどいたこと、菅楯彦の作品は今朝熱海からとどいたこと、榊原紫峰のみ出品できるまで進捗していないことが報告され、最後に画家の紹介があり、四時四十五分に式を終えた。その後五時半から今橋つる家にて新聞者主催の招宴があった。この寄贈について報道した翌日の朝日新聞の記事が資料に添付されている。**【図1】【図2】**

一月十七日、贈呈式のおりに、大阪市側から、家長である住友男爵が大阪市に作品を贈呈するにあたり、通常の手続きとして寄付申出書を作成し提出する必要のあることが住友側に伝えられた。また賞勲局と文部省と大阪市の表彰のためには住友男爵の履歴書が必要とのことも伝えられたため、その草案が昭和十九年一月二十二日付で決裁されている（⓰）。

なおこれらの作品は三月十五日（水）から二週間美術館で公開する予定が確認された。

関西邦畫展の廿傑作寄贈
住友家から大阪市美術館に

【図１】

きのふ大阪市へ寄贈
關西邦畫展へ出品の力作廿點

【図２】

十三、揮毫画家への援助機の配分について

昭和十九年三月一日

次いで一月二十九日には、揮毫画家への援助金が公布され、住友銀行本店営業部から作家に小切手をもって支払うこととなった。

それについて三月一日、平井から北澤宛の報告（⑰）では一万円の図録制作費は完成まで朝日新聞が保管、十五万円の援助金、一万円の表具題は幹事役である福田平八郎、小野竹喬、北野恒富を朝日新聞本社に招いて手渡すことに決まり、一人あたり七千五百円と表具題五百円を併せた八千円が全員に均等に分配されることとなったと書かれている。

平井の手紙には贈呈式のおり、金嶋桂華の野鶴中央に若干の傷画入るという事故があった、修理してももとどおりにならないから、自分の死後その作品が残るのは困るので援助金は受け取れないということも書かれている。

そのようなことがあったが、大阪市立美術館に無事寄贈され、援助金も配分され、後は図録の完成と美術館での展観を待つばかりとなっていた。

十四、『関西邦画展覧会』の中止　昭和十九年三月八日

ところが昭和十九年三月八日の平井常次郎から住友本社常務理事宛の書簡には次のように記される。（⑰）

資料六　平井常次郎の書簡

さて来る十五日より市立美術館にて開催四点の展覧会準備はその後着々とすすみ紫峰、華楊、平八郎、楯彦四点の完成搬入も茲一両日に迫り、一方金嶋桂華の傷めた絵の出品についても目下上京中の画伯の帰洛を待ち交渉を重ねる段取りに致していましたところ、只今突然美術館より電話があり、

「十五日より開催準備中のところ大阪市の方針として決戦非情措置要綱の趣旨により不意の文化事業一切を中止することになり、この展覧会も急にやめることに決定しました。悪しからずご了承を願ふ」との申し入れがありました。電話の口頭申入のことでもあり市民局当局から正式の通達に接したわけではありませんが四の最高方針とあれば暫く開会の時期を延ばすより致し方ないことであろうと存じます。

なほこの延期については大阪市当局より住友家に対しても了解を得るのが当然のことであると思ひますので、右手続を進めるやう小生より指示してをきました。

右取り急ぎご報告申上げます。

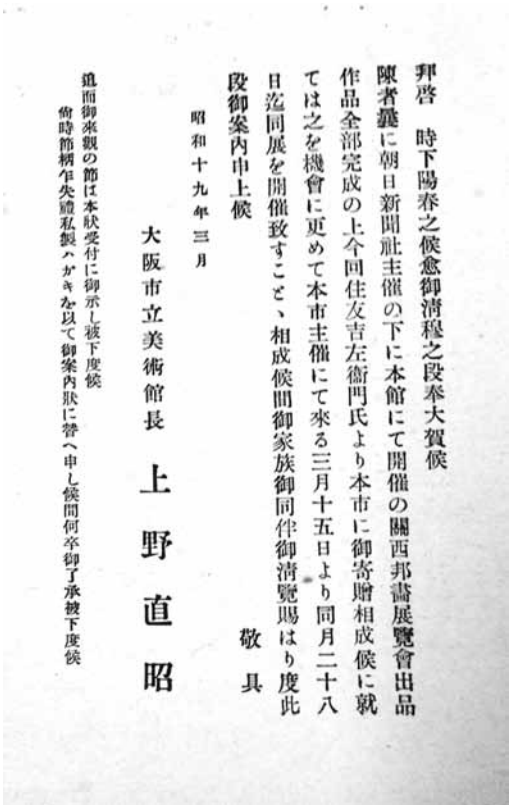
なほ小野竹喬の「秋陽」は本人がどうしてもあの絵では意に充たぬところ

かあるので今回新しく画き改め別の絵を数日中に届けることになってをります。また楯彦の「千槍将発」も先日の贈呈式当日に出品したのよりは遙かに大きなものを届けてくれることになっています。展覧会が中止となればこれらの名作が揃った上で一度住友家の皆様の御内見を得て置いては如何なもので御ざいましょうか。

以上

書簡の全文を掲載したが、大阪市の決戦非常措置要綱の趣旨により、結局、全点の揃った「関西邦画展覧会」は寄贈の後開催されなかったのである。そしてこの書類には開催されなかった展覧会の案内状が添付されている。【図3】

結果として展覧会は開催されなかったが、その後幸いにも戦災にあうことなく、大阪市立美術館には現在も二十点の作品が保管されており、戦時中の作品ではあるが、なかには文展をさしおいてまで制作にあたったという画家もいるほどの力作が揃っている。冒頭に述べたように美術館にはこの展覧会に関する記録は残っていない、しかし寄付申出書の素案が住友側に残っていることから、その書類は間違いなく大阪市に渡された後破棄されたものと推測される。



拝啓　時下陽春之候愈御清穆之段奉大賀候
陳者曩に朝日新聞社主催の下に本館にて開催の關西邦畫展覽會出品作品全部完成の上今回住友吉左衛門氏より本市に御寄贈相成候に就ては之を機會に更めて本市主催にて來る三月十五日より同月二十八日迄同展を開催致すこと、相成候間御家族御同伴御清覽賜はり度此段御案内申上候
敬具
昭和十九年三月
大阪市立美術館長　上野直昭
追而御來觀の節は本狀受付に御示し被下度候
尚時節柄乍失禮私振ハガキを以て御案内狀に替へ申し候間何卒御了承被下度候

【図3】

結語

大阪市美術館では、長らくこの展覧会の詳細については忘れられており、なぜか戦争中に発行された図録『関西邦画展覧会畫集』は美術館書庫にはなく、平成五年の調査に際して、住友史料館から御寄贈いただいた。図録は結局全てが色刷りにならなかったが、一点ずつの作品には作者の感慨が記されている。最後に当館の収蔵品台帳に記された名称、『関西邦画展覧会畫集』に掲載される名称と、作品の完成時期についてまとめておきたい（資料七）。

資料七　関西邦画展覧会出品作品情報のまとめ（以下の作品のうち□は昭和十八年、■は昭和十九年に完成した。）

□藝能譜（図版①）中村貞以（１２４４）関西邦画展図録番号（以下図録番号と省略）一一、昭和十八年九月七日大阪市立美術館に搬入。大阪・京都・東京展に展示。

□聖苑（図版②）石崎光瑤（１２４５）図録番号四、搬入日時は不明だが大阪・京都・東京展に展示。

□絶澗の夕（図版③）西山翠嶂（１２４６）、図録番号一〈原色図版〉搬入日時は不明だが大阪・京都・東京展に展示。

■秋陽（図版④）小野竹喬（１２４７）図録番号八は「新冬」の名称がある。これは当初の「秋陽」とは異なる作品である。当初の作品は大阪・京都の

展覧会に展示したが、満足できなかったため東京展から別の作品が出品された。ところが再度満足できなかったため、昭和十九年三月に大阪市立美術館で開催される予定であった展覧会のために改めて制作した。そのため現存する作品の制作年は昭和十九年となる。

□朝霧（図版⑤）金嶋桂華（１２４８）図録番号九では「真鶴」として掲載、昭和十八年九月六日「野鶴」として大阪展に搬入した。しかし作品が破損したので後に修復し、寄贈した。

□夜櫻（図版⑥）北野恒富（１２４９）図録番号一八、昭和十八年八月三十日大阪店に搬入

■櫻（図版⑦）福田平八郎（１２５０）図録番号一六は「山櫻」という名称で掲載、大阪、京都、東京の展覧会には完成せず、昭和十九年十六日、大阪市立美術館への贈呈式に漸くまにあったため戦前は展示の機会がなかった。作品の完成は昭和十九年である。

□如意輪観音（図版⑧）堂本印象（１２５１）図録番号六では「如意輪観世音菩薩」搬入時は不明だが大阪・京都・東京展に展示。

■朝靄（図版⑨）榊原紫峰（１２５２）図録番号一七、昭和十八年九月十日搬入の予定であったが結局昭和十九年一月の寄贈時にもこの作品だけは完成せず、大阪市立美術館で昭和十九年三月八日から開催される予定であった展示に併せて完成し搬入された。作品の完成は昭和十九年である。

■千槍将発（図版⑩）菅楯彦（１２５３）図録番号二〇では「敵将に近し」の名称で掲載されている。大阪。京都。東京展に間に合わず、結局昭和十九年十七日、大阪市立美術館への贈呈式の日に漸くまにあった。しかしその作品に満足せず贈呈式に出品した作品とは異なる大作を昭和十九年三月の大阪展にあわせて作成し先のものと交換している。現存作品と同一構図の作品をこの時三点制作したと資料にある。

□北政所（図版⑪）菊池契月（１２５４）図録三（原色）昭和十八年九月六日搬入の予定であったが、結局大阪展には間にあわず。九月二十一日大礼記念京都美術館に搬入、京都展・東京展に出品。

□幽谷早春（図版⑫）水田竹圃（１２５５）、図録一九昭和十八年八月三十日搬入、大阪・京都・東京展に出品。

□若松（図版⑬）徳岡神泉（１２５６）図録番号七では名称が「松」となっている。搬入日は不明であるが大阪・京都・東京展に展示。但し未完成のため加筆とある。

□讃光（図版⑭）橋本関雪（１２５７）図録五　昭和十八年八月三十日、大阪市立美術館に搬入。大阪・京都・東京展に展示。

□晩秋（図版⑮）上村松園（１２５８）図録番号二として原色図版掲載。昭和十八年九月八日大阪市立美術館に搬入。大阪・京都・東京展に展示。

■風（図版⑯）山口華楊（１２５９）、図録一四では「風の柳」、当初は豹を各予定であったが、昭和十八年従軍のため締め切りにまにあわなかった。そのため大阪、京都、東京で開催された展覧会には出品していない。昭和十九年十六日、大阪市立美術館への贈呈式に漸くまにあったため美術館での公開は戦後のことである。

□出潮（図版⑰）窠本一洋（１２６０）図録一五昭和十八年八月三十日大阪市立美術館に搬入。大阪・京都・東京展に展示。

□那智奉拝（図版⑱）矢野知道人（１２６１）、図録番号一三、昭和十八年八月三十日搬入、大阪・京都・東京展に展示。

□松（図版⑲）宇田荻邨（１２６２）、図録番号一二、搬入日は不明だが、大阪・京都・東京展に展示。

□山本元帥（図版⑳）中村大三郎（１２６３）図録番号十、昭和十八年九月六日大阪市立美術館に搬入、大阪・京都・東京展に展示。

当初の予定では関西邦画壇の代表的作家による二十点の作品によって、大阪市立美術館、大礼記念京都美術館、東京三越百貨店で開催される予定であった『関西邦画展覧会』であるが、結局昭和十八年九月六日に当館で開かれた展覧会に出品された作品は十五点で引きつづき行われた京都美術館、東京三越百貨店での展示には十六点が出品された。そのためこれらの作品はすべてが揃い住友家から大阪市立美術館に寄贈された後、昭和十九年三月に再度展覧され一般に公開される予定であった。しかし戦争激化によりこの展示は中止され二十点が一堂に展示される機会は平成五年までながらく無かった。[11] 二十点の作品の一点一点を見ると菊、鶴や松といった日本的な主題がとられてはいるが、一点一点が戦争を主題とする二点をのぞけば激化する戦争のなかで国民の戦意を鼓舞しようとした意図はさほど読み取れない。しかし、これらを一堂にすると、大きく切実な感慨が伝わり、またその時期を想起すれば画題の選択の背景にある時代を推測することができる。さらに資料から制作、あるいは展覧会開催に関わる経緯を知ると、現代とは異なる創作活動、文化事業と国家そして戦争との関係も窺える。作品から受ける凛とした印象は当時の画家、制作に関わる人たちの心境を表しているのだと思う。

註

1　『大阪市立美術館五十年史』には以下のように記される。住友家の肝煎りで、関西在住の日本画の大家、二十人（大阪四人、他は京都）に「最も得意とせる自由なる画題のもとに後世に残るべき一大傑作を」描いてもらったのを、十八年九月一日から十四日まで朝日新聞主催で南館に於いて開催された。（中略）翌十月二十三日から二十八日には東京日本橋の三越でも開かれ、二、三の蜜柑制作不出陳（楯彦、紫峰、平八郎、華楊）をのぞいても、「本年度の日本画展でも最も内容の充実した展覧」（『日本美術年鑑』）と頗る皇朝であった。これら一括を住友吉左衛門氏が本館に寄贈ということで、それを機会に改めて本館主催で十九年の三月十五日から二八日迄、北館一階彫刻室で全点完成披露陳列をする手筈で、その案内書も残されている。しかし乍らこの展覧会は「大阪市決戦非常措置要項」なるものによる「不急」の文化事業とされ、直前に中止という憂き目をみた。

2　村松寛著『美術館散歩』河原書店　一九六〇年

3　昭和三十二年の寄贈品がなぜ住友本社からの名義になっているのかというのが、関西邦画展について調べるきっかけであった。資料の存在は末岡照啓氏（住友史料館）からご教示を受け、当時、資料館の書類は複写不可能ということで、筆写して調査させていただいた。その資料を読み、平成五年十一月三十日から十二月十九日まで、寄贈を受けた全作品を大阪市立美術館で初めて一堂にする、「住友家寄贈　関西邦画展覧会出陳の日本画」という特集展示を開催した。その後作品は平成十六年十月、東京の泉屋博古館分館で「関西邦画展覧会　大阪市立美術館所蔵による」として公開された。

4　資料の大半は住友資料館に保管される当時の住友本社の決裁書類などで、**【表1】**の通である。かつては複写不可であったこと、内容が戦争に関わることであったため、今まで紹介してこなかったが、近年複写可となったことから、資料を使いながら展覧会と作品寄贈の顛末について記したい。

この書類の多くは住友本社総務部庶務課の起案する様々な決裁書類と報告書で、住友側の主な担当者は本社常務理事であった北澤敬次郎（一八八九～一九七〇）である。昭和十六年から終戦時にかけて常務理事であったため、昭和二十二年公職追放となるが、昭和二十五年大丸の社長となる。当時の住友本社総理事は古田俊之助（一八八六～一九五三）。川田順（一八八二～一九九六）はかつて常務理事を務めており、時期総理事といわれていたが昭和十一年に退職、歌人でもあった。住友吉左衛門は十六代友成（一九〇九～一九九三）。

朝日新聞側の担当者は朝日新聞大阪本社業務局長天野四郎（後に朝日広告社社長）、朝日新聞大阪本社常任監査役刀禰館正雄（一八八八～一九四三）、朝日新聞大阪本社参事木村已之吉、朝日新聞者理事兼大阪本社計

画部長朝倉斯道（一八九三～一九七九、後に神戸新聞社長）、朝日新聞企画局総次長兼大阪本社企画部長平井常次郎（後に朝日放送社長）である。朝日新聞社長は村山長挙（一八九四～一九七七）。

5 大阪市立美術館は先代住友吉左衛門が、茶臼山本邸の敷地を用地として寄贈して建設されたものであるため、住友関係者には思い入れのある場所であったと推測される。決裁の書類には「現美術館ニハ時代の感激を後に伝ふる力作多からず点に鑑む」と書かれている。

6 当初は以下の画塾があげられた。丈杖会は竹内栖鳳が主宰。徳岡神泉、上村松園、橋下関雪、西山翠嶂、小野竹喬などが属した。菊池画塾は菊池契月の画塾で宇田荻邨らを輩出。早苗会は山本春擧が主宰し、川村曼舟らがでた。東丘社は堂本印象が昭和九年に主宰。青甲社は大正十年に西山翠嶂が作り、堂本印象、中村大三郎らが出た。

また最終的に出品者となる二十名以外には竹内栖鳳（一八六四～一九四二）、川村曼舟（一八八〇～一九四二）、福田恵一（一九一四～一九五六）、登内微笑（一八九一～一九六四）、水田硯山（一九〇二～一九八八）、遙村（一八九五～一九八八）、雪松春浦（一八九七～一九六二）、森守明（一八九二～一九五一）、鉄山、十糸子、晁勢、上村松篁（一九〇二～二〇〇一）、白倉二峯（嘉入一八九六～一九七四）、山本倉丘（一八九三～一九九三）、秋野不矩（一九〇八～二〇〇一）、不二木阿古（一八九六～一九四三）などの名があった。

7 田中日佐夫著『日本の戦争画　その系譜と特質』ぺりかん社　一九八五年ほか。

8 この決裁には同年三月に東京三越、四月に大阪三越で開催された日本画家報国会主催の「軍用機献納作品展覧会」の資料が参考として添付されている。

9 大政翼賛会文化部が文部省と情報局との協力のもとに昭和十八年五月美術作家を一丸とする社団法人日本美術報国会が結成された。

10 ❻の既述からこの時、大阪市立美術館で初めて絵画の展示に手摺を用意したことが記されている。

11 「住友家寄贈『関西邦画展覧会』出陳の日本画」拙稿『美をつくし』150号　平成十年二月　大阪市立美術館

【表1】

❶寄第一五八号	昭和十七年三月七日	大東亜戦記念作品画援助買上ノ件
❷寄第四二九号	昭和十七年七月二十三日	大東亜戦記念作品画ニ関スル件
❸雑第九一四九号	昭和十八年六月八日	大東亜戦記念作品画展覧會　期日延期ノ件
❹雑第九一八九号	昭和十九年七月十四日	大東亜戦記念作品画援助買上ニ関スル件
❺雑第九二二五号	昭和十八年八月三十一日	戦時文化發揚『関西邦畫展覧會』會期一部変更ノ件
❻雑第九二五四号	昭和十八年九月二十一日	関西邦畫展覧會に関スル件
❼雑第九二六八号	昭和十八年九月三十日	関西邦画展覧會ニ関スル件
❽雑第／号	昭和十八年十月二七日	朝日新聞企畫局次長平井常次郎氏ヨリ関西邦畫展覧會経過報告越ノ件
❾雑第九三〇九号	昭和十八年十一月十日	関西邦画展ニ関シ報告越ノ件
❿本第五一九号	昭和十八年十一月十五日	関西邦画展作品写真受領ノ件
⓫雑第／号	昭和十八年十二月二十八日	朝日新聞社ヨリ関西邦画展覧會ニ関し情況報告越ノ件
⓬雑第九三七六号	昭和十八年十二月三十日	関西邦画展覧會ニ関シ朝日新聞社ニ出状ノ件

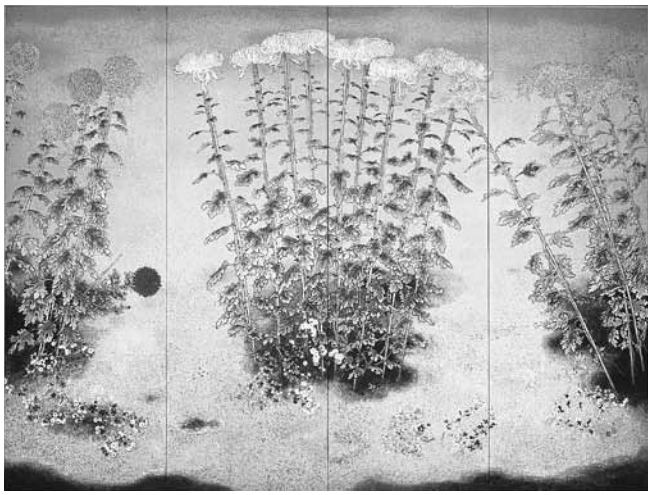
⓭雑第九〇〇五号	昭和十九年一月八日	大東亜戦記念作画展贈呈ニ関スル件
⓮雑第／号	昭和十九年一月十七日	関西邦画展作品贈呈式　總理事　御挨拶草案
⓯第　号	昭和十九年一月十八日	戦時文化発揚「関西邦画展」作品贈呈式ノ件新聞記事　等
⓰雑第九〇一七号	昭和十九年一月二十四日	関西邦画展作品寄付申出書差出ノ件
⓱雑第九〇四一号	昭和十九年三月一日	関西邦画展揮毫画家ニ対スル援助金配分ニ関シ報告越ノ件
⓲雑第九〇四二号	昭和十九年三月二日	（関西邦画展作品関係）上村松園女史　並　朝日新聞社平井企画部長ニ出状ノ件
⓳寄第／号	昭和十九年三月八日	朝日新聞社平井氏ヨリ関西邦画展覧會中止ニ付報告越ノ件

関西邦画展開催までの略年譜

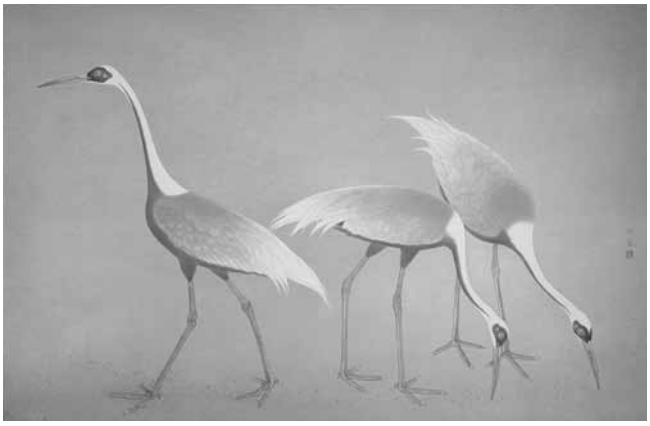
昭和十七年二月	二十五日、関西画壇の画塾から40名の画家に時代の感激を後世に伝える大作品を作成させ、篤志家に買い上げてもらい、その資金を画家から飛行機を献納する展覧會を朝日が企画し、資金提供を住友に打診。大阪市美に寄付という条件で住友がうける。
昭和十七年七月	二十三日、全額寄付する条件でひきうける画家がないので飛行機献納はあきらめ、20名ほどの大家に大作を書かせる絵画展とする。
昭和十七年十一月	二十八日、画家を集めた説明会を村山社長がおこなった。
昭和十八年五月	二十日締め切り、二十一日大阪市立美術館に搬入と決まる。
昭和十八年六月	九日から十九日まで大阪展を予定。（延期になる）
昭和十八年六月	十九日から二十三日まで京都展を予定。（延期になる）
昭和十八年六月	一日、締切に間に合わない画家が多いので延期を要望。
昭和十八年九月	一日からに大阪展の開催を九月六日に再度延期。
昭和十八年九月	六日から十四日まで大阪市立美術館で展覧。出品は15点
昭和十八年九月	二十二日から二十八日まで京都美術館で展覧。出品は16点
昭和十八年十月	二十二日から二十九日まで東京店開催。16点出品
昭和十九年一月	十七日に大阪市立美術館で贈呈式を行う。19点到着
昭和十九年二月	一日『関西邦画展覧会畫集』朝日新聞大阪本社企画部から平井常次郎編、便利堂印刷で百部限定非売品として発行
昭和十九年三月	八日、大阪市から決戦非常措置要綱の主旨により中止決定の通知。
昭和十九年三月	十五日から大阪市立美術館で公開の予定が中止。作品は八日には総て完成の上美術館に搬入されていた。
昭和三十二年二月	四日、開館二十年にあわせて台帳かきこみ。

図版① 藝能譜　中村貞以

図版③ 絶澗の夕　西山翠嶂

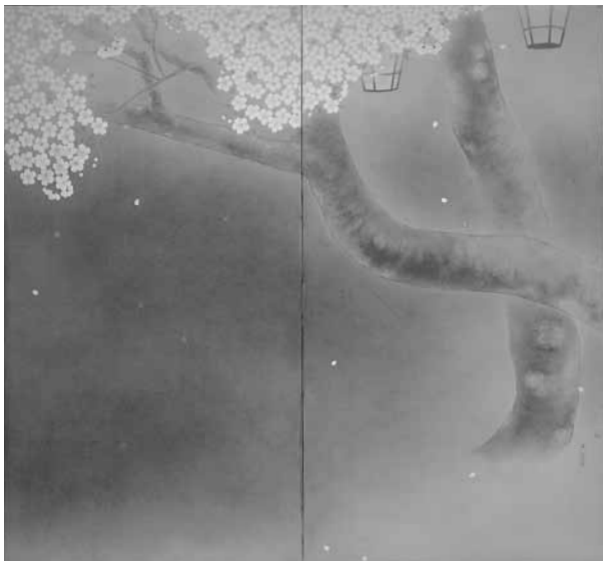


図版② 聖苑　石崎光瑤



図版⑤ 朝霧　金嶋桂華

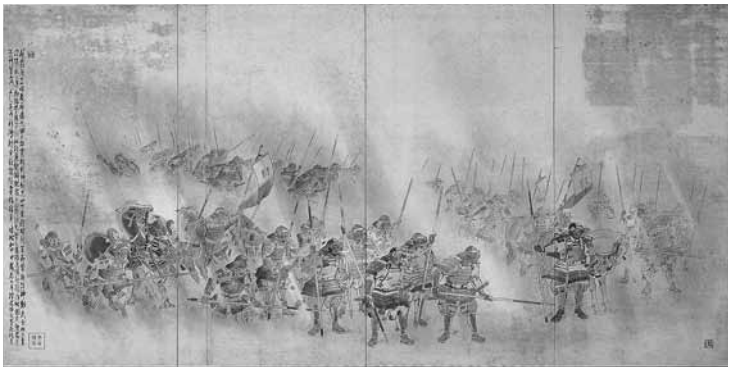
図版④ 秋陽　小野竹喬



図版⑥ 夜櫻　北野恒富

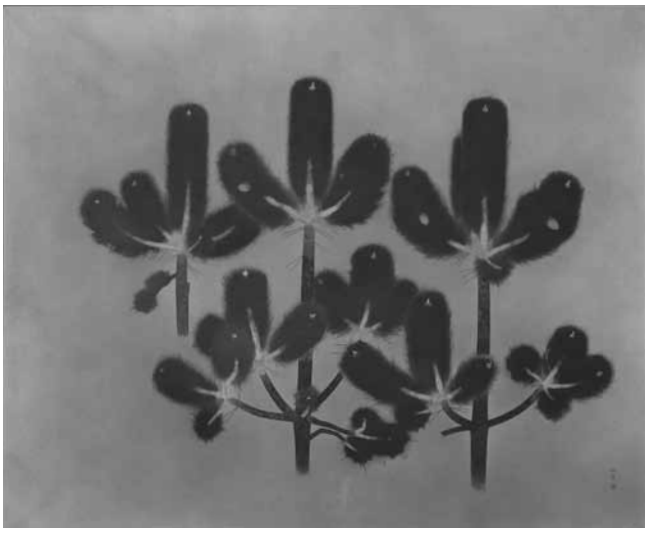
図版⑧ 如意輪観音　堂本印象

図版⑦ 櫻　福田平八郎



図版⑩ 千槍将発　菅楯彦

図版⑨ 朝靄　榊原紫峰



図版⑬ 若松　徳岡神泉

図版⑫ 幽谷早春
水田竹圃

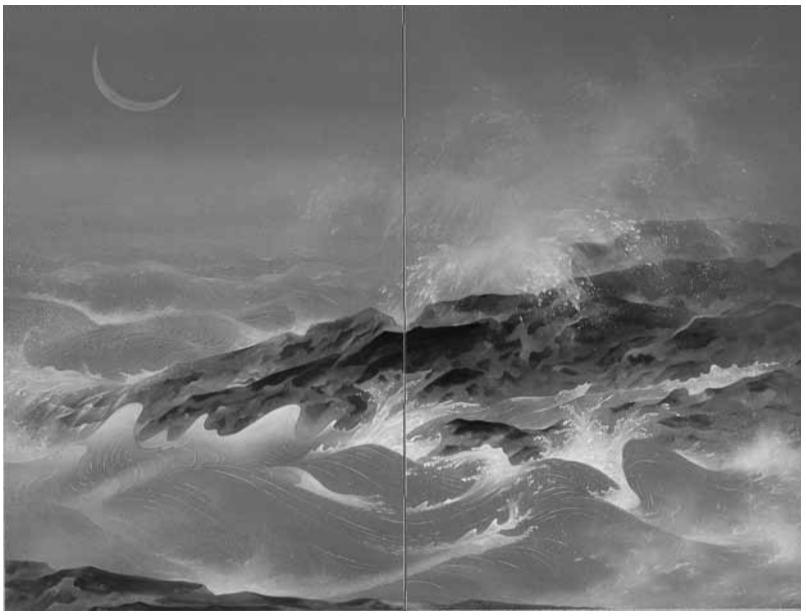
図版⑪ 北政所　菊池契月

図版⑯ 風　山口華楊

図版⑮ 晩秋 上村松園

図版⑭ 讃光　橋本関雪

図版⑱ 那智奉拝　矢野知道人



図版⑰ 出潮　窠本一洋

図版⑲ 松　宇田荻邨

図版⑳ 山本元帥　中村大三郎

付録　『関西邦画展覧会畫集』より序文、目次、画家のことばの抜粋

〈序文〉

住友男爵家においては、かねて大阪における文化活動の極めて乏しきを遺憾とし、先代吉左衛門男は天王寺茶臼山の邸宅を敷地として提供し、ここに大阪市に依って建設される美術館を大阪における美術運動の中心たらしめ、大いに文化的使命の高揚とその達成を祈念した。さらに当代吉左衛門男は昭和十五年、厳父の豊富と遺志を顕現すべく、この美術館を真に美術の殿堂として善美なる内容を持たしむべく、これに魂を吹き込む意味から、現代日本画壇の巨匠に嘱して各自後世に残るべき自信ありう作品を新しく制作っっし、これを大阪市に寄贈して永く同館に保管すべく所期し、画家の選定をその他すべての企画ならびに実施を朝日新聞社に一任した。

よって朝日新聞大阪本社企画部では京都及び大阪の日本画壇より

石崎光瑤、橋本関雪、西山翠嶂、堂本印象、徳岡神泉、小野竹喬、金嶋桂華、中村大三郎、中村貞以、上村松園、宇田荻邨、矢野橋村、山口華楊、楪本一洋、福田平八郎、榊原紫峰、菊池契月、北野恒富、水田竹圃、菅楯彦（いろは順）

の二十氏を選抜し、これにその制作を依頼した。諸家はその重大なる意義にかんがみ、精魂をこめて制作に没頭、やうやく昭和十八年秋に至ってその完成を見た。よって朝日新聞社ではこれを大阪、京都及び東京において広く一般に公開展観したるのち、一括して大阪市立美術館に納入、同館ではこれを市宝として永く秘蔵することになった。本画集を納むるところ、すなわちこれである。

昭和十九年一月

〈目次〉

原色版

一　絶澗の夕　西山翠嶂

二　晩秋　上村松園

三　北政所　菊池契月

玻璃版

四　聖苑　石崎光瑤

五　讃光　橋本関雪

六　如意輪観世音菩薩　堂本印象

七　松　徳岡神泉

八　新冬　小野竹喬

九　真鶴　金嶋桂華

一〇　山本元帥　中村大三郎

一一　藝能譜　中村貞以

一二　松　宇田荻邨

一三　那智奉拝　矢野知道人

一四　風の柳　山口華楊

一五　出潮　案本一洋

一六　山櫻　福田平八郎

一七　朝靄　榊原紫峰

一八　夜櫻　北野恒富

一九　幽谷早春　水田竹圃

二〇　敵将に近し　菅楯彦

〈画家のことば〉

絶澗の夕　**西山翠嶂**（**図版③**）

寶塚より有馬への山越に蓬莱仙郷と称せられている奇勝の在ることをかねて聞いていたが偶然そのコースをたどる機会を得た。嶮しき山路といふ程でもないが、辿り行くうちに景は移り境は轉じ、見上ぐる對壑には一道の清流を挟んで奇峭千仞の長壁が極りなく展開されてくる。全面には禿げた粘土質の丹黄土色を帯びた大斧壁の巨巌、點綴する陰々たる緑樹、新鮮なる若葉の目覚めるばかりの美しい色、清谿白銀の流れ、それ等の拝見をなして磅礴せる六甲山一帯は翠壁連峰重畳し、さながら雄偉なる景観を示している。この自然の調色の妙と渓壑の奇、満月峡中沈々として聲なき神秘感は空想を逞しうするに餘りあり、只恍惚として我を忘れてこの大自然の呼吸の中に浸ることのできたのは、創作の上に多大の力強いものを得た。構図上絶澗の天球に結う月を配したのは寂莫無人の静峡への添景とした。

晩秋　**上村松園**（**図版⑮**）

明治時代、幼少のころの私の思ひ出である。

秋もいよ〳〵深み母はそろ〳〵障子のつくろひをやるとき、私はよくいろくの紙型を切らされたもので、母はそれを丹念に切り張りしたことがまざ〳〵と記憶に残っている。髷もその頃の流行である京風の「いびし」によく結っていたが、この「晩秋」は當時のなつかしい記憶をたどって描いたものである。

北政所　**菊池契月**（**図版⑪**）

関西邦画展の作品は大阪市立美術館に保存されるといふので、大阪にちなんだものを描くべく豊公か北政所を選ぶことにしたが豊公の肖像画はなく、わずかに京都高臺寺に法衣をまとひ頭巾をかむった法體圖の北政所の繪があ

るばかりでこれとても頭巾に顔がかくれているので、特徴を摑み得なかった。然し豊満な、非常に穏やかな相貌で要するに来た政所はそうした人であり、また豊公の波瀾に富んだ生涯を過りなく送らせた内助の功は偉大であり、その聰明さを表面に現はさなかったところに、この人のよさが感じられて「北政所」を描いたのである。

聖苑　石崎光瑤（図版②）

久かたの雲の上にて見る菊は
　天津星とぞあやまたれける　敏行
秋風の吹上に立てる白菊は
　花あらぬか浪のよするか　官公
君が住むやとの坪には菊そ飾る
　仙の宮といふへかるらん　西行

等しく是等皆、禁庭の菊を詠嘆せしもの、遠く上代より、雲上に菊を愛でさせられし御韻事を窺ふに足る。近くは、御歴代此花の頃ともなれば、文武百官を御苑内に召され、頒ち讃えさせ給ふをつねとせられたが、此御盛儀も、大東亜戦争勃發以来其事無しと承はる。天地悉く清澄、萬衆皆静粛の氣に満つる秋の最中、禁園の一隅に今も咲き誇る此花、獨り、静かに芳芬を漾はせること膸ゝ思ふ。薫風の頃咲き出づる牡丹は、豊麗目を奪ひ、げに百花の王たるを失はないが、秋霜に映ゆる菊花は、華麗を超えて其氣品の至高、自ら身に迫るを覺える。高湿の御紋章の、此の花より象られたる寔に故なしとない。

年々歳々、此の花の寫生に私は幾旬を過すを例とする。此作隅々其の一部の發表である。拙筆この花の美しさを把ち得ず、徒らに冒瀆の罪を重ねしにとゞまる。慚愧の極みと云ふ他は無い。

讃光　橋本關雪（図版⑭）

燦々たる陽光を浴びて、鳥は空に歌舞し、草木は欣欣として知に榮えて居る。戦友の遺靈を棟に屹として立てるは陸戦隊員、遠くに見ゆるはコレヒドール要塞の一角。昭和十八年八月、コレヒドールを訪れたる時の感激を象徴して描けるものである。

如意輪観世音菩薩　堂本印象（図版⑧）

如意輪観世音菩薩を製作したいと思っていた時にこの機會を得たので、拝寫したのですが、表現して見ると思ふようにはゆきませんでした。

松　徳岡神泉（図版⑬）

この制作より約一年前洛西西山麓の赤土山に齋松の並立せるを見し事あり。朝陽を受け畫境實に幽玄にして荘厳の深さに觸れたる思ひし強く迫力に打たれし事あり。

こゝに取材の因はこれが畫境再現せんとの企画に依る。

然し乍ら當時の感激を如何に髣髴せんも現實に對象を凝視し求むるも、制作に對して精神や態度がぢかにこちらへ觸れて来るような純粋且つ、端的に表現は容易でなく、制作過程の内に段取りの苦惱が重く沈んで精神の在虚を異に斯く難解の凡作となる。

遺憾の點多々ありとは云へ情熱的試練の作と思ふ。

新冬　小野竹喬（図版④）

新冬圖は、中禪寺湖畔から徒歩で日光驛へ下る坂道の、出口のところから得た畫材である。

日光の一區が、國立公園指定地であると云ふ景勝の故ばかりでなく、西日

本の風光を見慣れた私には、この旅での感興は相當新しい價値を持った。十月下旬であったが、既にこのあたりは冬の景色で、僅か一週間の滯在中に降雪にあひ、防寒の用意の無かった私は、帰京を早めた位であった。

男體山の背の逼ったところから、右に見下す一望の景色が圖の焦點で、枯林の蕭索たる間を縫ふて展望する山容のなだらかな線、枯草山の黄な色、赭色の林巒などが美しく浮き出ていた。日差しのか關係か、山の中腹から下部は深い陰影に隈どられて圖の構成の變化を助けてくれる。畫圖の興味はそうしたもの、織り成す重厚な美しさから生じたものであった。

眞鶴　　金嶋桂華（図版⑤）

北國の天地を想像して、静寂とか崇嚴とかの氣持で天地を畫き度い。そしてそういふ處に棲息する眞鶴を描きたく、たまたま群生の眞鶴を見る機會があったので描いた。霜の朝のような感じで作畫した。

山本元帥　　中村大三郎（図版⑳）

山本元帥が戰死されたのを始めてラジオで聞いた瞬間、元帥像を描くことを念願した。

かうした作畫の動機は今迄にないことである。

爾来、當時未だ病氣の全く癒えない中を押して準備にかゝつた。

完成後、元帥の御遺族を東京に御訪ねし、親しく御靈前に額づき得たことは、何か此作品の終りを完うすることが出来た感を深くした。

色々の意味に於いて此作品は感慨の深いものがある。

藝能譜　　中村貞以（図版①）

私達藝學人は總てをわすれたかつた。その氣持が私にこの繪を描く動機を與へてくれた。「今日の時代を残す」と云ふ趣旨に應えて、色感等は當期の既に不自由にならんとしつゝあつた。そして單純化されつゝあつた色感、或いは模様等を取り入れて見た。人物の顔形の感じは大體の涌等を参考にしたものである。

松　　宇田荻邨（図版⑲）

松は常盤木でもあり、櫻と共に日本の代表的な樹木である。しかも慶事を表徴するものとして日本民族には必要け缺くべからあるものである。

この松を畫材としたのは、海濱の松林に明方の朝日がほのかに出たところを表現しようと思つた。私としては幹にしても葉にしても丹精的に仕上げようと努力したのであつたが、充分意圖を果し得なかつたのは遺憾である。

那智奉拝　　矢野知道人（図版⑱）

那智御瀧、飛瀧神社は爲醫藥禁厭の神として御神徳頗る厚く、大巳貴樽尊を御祭鎭、古來延命長壽の守護神として尊信を集めて居る。

口傳する所に依ると神武御東征の際此の飛瀧神社に御武運の長久を御祈願遊ばされたよし。

大東亜戰争愈々苛烈を極めつゝある折柄、此の那智御瀧に參拝必捷を祈念して、作為の動くに任せて「那智奉拝」の圖を制作したのである。

風の柳　　山口華楊（図版⑯）

柳、それは自分の少年時代を過ごした家の前に相當大きい柳の木があつた。暑中休暇も終りに近い頃になると、嵐の季節になり、勉強部屋の小さな窓に魔物の様な姿を風の吹く毎にのぞかせて居た。

風の柳の構想はそんな頃からの印象が役立つている。

強い嵐に其の細い枝をなびかせながら力強く耐え抜く力、靡きはね返す小枝の彈力性のある線、銀色の裏葉のリズムの美しさ、等々、さては颱風一過の後の雲間に思いがけず三日月の靜けさを見出した時の夕べの喜び等を一作にまとめ上げて描いて見たいと思つたのである。

出潮　　**案本一洋（図版⑰）**

源實朝の
大海の磯もとゞろによする波
　われてくだけてさけてちるかも

この歌から、海の泡立つ波、荒天の出潮を描いてみたく、紀州の潮岬、丹後の間人の濱など波の荒い處を見に行きました。海底まで泡立つ有様、波の動き、波の色、強く打つ波、やはらかに引く波、金色に濡れ光る巨巖、潮煙のあなたにかゝる細月のまたゝき等を悠久にゆるがぬ姿としてるこの「出潮」を描いてみました。古畫も色々見ました。そして驚いたのは光琳の水に對する研究の深いことでした。靜かな水も大海の巨浪の姿にも心ゆくばかり自分のものになし切っていることでした。あの美しい線のうちにしつかりと把握して、しかも畫格も高く豊かに樂死んで描きこなしていることでした。今更ながらその非凡さを感心しました。

私の「出潮」は大和繪のもつ民族的な古格のうちに動きを求めたのでしたが……。

山櫻　　**福田平八郎（図版⑦）**

取材を山櫻に求め、四月中旬頃から山櫻の寫生を始めた。花がすんだ頃から八重山吹を加へたいと思つたが眞盛りを過ぎていたので、急ぎ宇治、井手の玉川、嵐山方面を廻つたが、既に遅く、最後に大原へ行って漸く捉へることが出来た。五月中旬いろ〳〵と構想を練った結果、花を断念して太い櫻の幹三本に新芽を配することに決定した。然し櫻花の寫生に没頭していたゝめ、新芽の寫生に不足を感じ、京洛はもとより、高野山、日光、中禪寺湖畔、越後赤倉の各方面に新芽を求めたが得られず、軽井澤、小諸附近に引返して、辛くも自分の求めていたものに出會った。三本の櫻の幹は平安神宮の神苑のものである。愈々制作に着手したが、失敗を重ねること八回、一時は斷念したが、再起奮闘の結果遂に完成を見たのがこの作品なのである。失敗の原因を探求して見ると、あまりにも主観的に考へすぎたのがいけなかつたので、むしろ勇敢に寫實で進めばよかつたと思はれる。然しこの失敗の連續こそ修行の一つであり、ずいぶんよい勉強になつたことを今では感謝している。

朝靄　　**榊原紫峰（図版⑨）**

鹿の顔や表情や總ての動作は、憎めない。性格の清らかな動物である。鹿の親子は仲良く茫の野原で徹夜して、夜が明けて朝露を食つたりして非常に屈託のない自然の生活を現はしている。この自然の姿には惹きつけられる。その棲態はまことに清められる思ひがして、却つて動物の性格に教へられるような場合が多い。かうした氣持を幽玄な中にかもし出したかつたが、なか〳〵思はしく表現できなかつたのは残念である。

夜櫻　　**北野恒富（図版⑥）**

ズツと以前、もうその年月も記憶にないが、三四の友人と共に保津川を下り、夜は嵐山に一泊して張るの一夜を樂んだことがある。その夜の、夜櫻の思ひ出が、この作品を物せしめた主な動機と云へるだろう。

さうした思ひ出にかて、加へて、京の舞妓も時局の流れに添ふてなくなるさうな、とそんな噂を聞かされ、一筋に惜別の筆が動いたと云へるかも知れ

ない。

幽谷早春　　水田竹圃（図版⑫）

生來梅花を愛する私は、峰蜜の如く、春になれば梅花を尋ねて各處を徘徊する癖がある。一望千里氤氳たる梅樹の間を逍遙する時、心身共に蕭然として歸りを忘れることが多い。然し最も心を動かすものは、此の千萬樹の梅花よりも、只三兩枝の老梅が幽谷の清泉に横斜する姿である。寒風を凌ぎ霜雪に屈せず。嚴然として獨立する富士の如き姿こそ梅花の眞精神であると思ふ。私はそれが畫きたかつたのである。

敵將に近し　　菅　楯彦（図版⑩）

私の祖父は、筑後川の傍に生れ日田の淡窓塾に學んでいた折に、しばしばこの河畔に行き菊池公の古戰場を徘徊し、史を讀み地を踏んで憬慕措く能はず、また自家に菊池槍二、三を蔵していたのであつた。

私もこれらに刺激せられて、豫てより菊池武士の勇姿を描き瀧と念願していた。此圖も何れの戰といふことでなく、菊池千本槍といふ傳説に據り、三軍既に調ひ敵の來攻を機に反つて我より出撃せんと滿を持して將に發せんとする状を描いたものである。